
Bloody Night

ユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bloody Night

【Nコード】

N6345P

【作者名】

ユキ

【あらすじ】

吸血鬼・柰榴に仕える不老不死・篝。

柰榴は、まだ幼い頃に両親をなくした。だがその代わりに柰榴のそばにいたことになったのが篝。

篝は、幼い頃の柰榴に『好き』と言われ恋心を抱いていた。

だがある日柰榴に婚約者ができた。

その婚約者が実は、吸血鬼の宿敵“吸血鬼ハンター”だった・・・

普通じゃないこの世界・・・

今更に・・・

吸血鬼と不老不死

「柘榴様・・・」

「なに？」

俺は、悠木 篝・・・。火焰 柘榴様の使用人。

この屋敷には、俺と柘榴様だけが住んでいる。

柘榴様の御両親は、柘榴様が生まれてすぐ・・・柘榴様の名前が付く前にハンターに狩られた・・・。

柘榴様は、吸血鬼だ・・・。

そのため御両親は、その当時毎日のようにやっていた“吸血鬼狩り”で狩られてしまった・・・。その当時は、魔女狩りもあった。

今となつては、ハンターより吸血鬼や魔女の方が強くなり吸血鬼狩りはなくなつた・・・。

「婚約者様がお見えしていますが・・・どうしよう・・・？」

「ぜひお引取り願つてもらえないかしら。」

「かしこ参りました・・・」

俺も正直初めは怖かつた・・・。だが何を怖がる必要がある。俺だつて不老不死じゃないか・・・と思つてな。

俺と柘榴様が始めてあつたときは、柘榴様の名前がなかった。

まだ幼くて、まるで人形を見ているかのようにだつたよ。

名前を付けたのは俺だ。

名前の由来は・・・そばに柘榴の実があつたから。由来じゃないか・・・。

名前を付けてあげたせいかな、柘榴様は1日で俺に懐いた。

それが、可愛くて仕方がなかった・・・。

あるとき・・・

『かがり・・・好き』

俺は泣きそうになつた。

言葉を覚えたてのまだ慣れていない感じがものすごく可愛かつた。

それに俺は人間に『好き』と言われたのは、初めてだった・・・。
ロリコンと思うかもしれないが、その時から俺は柘榴様に恋心を
抱くようになった。

「ぜひ、お引取り願ってくれないか・・・と柘榴様が申しています
のでお引取り下さい。」

「・・・。柘榴は何処だ？」

（話を聞け・・・と思うけど言わないでおこう・・・）

俺はコイツが苦手だ。

元ハンターにして柘榴様の婚約者・・・柇 拓馬。

ハンターのくせして柘榴様に近づく悪い虫・・・

「お引き取りください。」

ボタンッ！

俺は、嫌みつたらしく扉を思いつきり閉めた・・・。

扉を閉めた音が屋敷に響く・・・

「苦手だ・・・」

カッソッ・・・

静かで綺麗なヒールの音・・・柘榴様がお部屋から出てきた・・・

「あいつ・・・帰った？」

「はい・・・つい先ほど・・・」

「そう・・・ならいいの・・・」

柘榴様もアイツが嫌いらしい・・・なんどもグチを聞いたことがあ
る・・・。

柘榴様は、アイツがハンターだってことは、ニオイで分かったらし
い・・・。

俺は、見た目でわかった・・・。

しかし・・・

なんて赤が似合う人なんだ・・・黒も白も似合うが・・・赤の方が
よっぽど美しい・・・

「なんだ？」

しまった・・・つい見とれてしまった・・・

おこられてしまう・・・。

「簀・・・」

「何でしょうか・・・」

怒られる・・・って顔じゃないな・・・

疲れてる？

「おなかですいた・・・」

「あ・・・申し訳ございません・・・今すぐ御用意いたします・・・」

すっかり忘れていた・・・もうこんな時間だ・・・柊の所為で・・・いやいや自分の所為だろ・・・人の所為にしてはいけない・・・しまった早く用意をしないと、怒られる・・・。

「待ちなさい・・・」

怒られる・・・

「用意している時間がもつたない・・・我慢できない・・・首から直接ちょうだい・・・」

「はい・・・」

直接は久しぶりだ・・・。

柊様は、いつも俺の血を食事に行っている・・・。

いつもは、時間になったら俺が自分で首か手首を切って血をグラスの中にいれてお出するのだが・・・こうゆう時間がないときや、柊様が我慢できないときは、俺の首から直接お飲みになるのだ・・・

「・・・っ・・・」

少し痛い・・・

首が熱い・・・

俺は、不老不死だから死なないが痛みは感じる・・・一般人の三分の一ぐらいだがな痛みは。

「おいしい・・・簀は、不老不死なのに血がとてもおいしい・・・何故だろう？」

「俺にもわかりません・・・」

分らない・・・何故美味と感ずるのか・・・。

不老不死は普通、一般人より血はかなりまずいはず・・・なのに何故俺の血は、美味と感ずるのか・・・柘榴様の味覚がどうかしてゐるのでは？・・・いやいや、こんなこと言ったりしたらかみ殺される・・・。

「・・・フウ・・・ごちそうさま・・・。」

この世には、“ウワサ”というものがある・・・。

その中に吸血鬼のウワサもある。

ウワサその一：吸血鬼は、日光に当たると灰になる。↓ ウソ（柘榴様は、日光に当たっても平気だ。少し、顔色が悪くなるが。）

ウワサその二：吸血鬼は、みんな美形。↓ ホントのホント（柘榴様は、超美形だ。）

ウワサその三：吸血鬼は、死なない。↓ ウソ（実際死んだ吸血鬼はゐる老死はないが・・・。）

ウワサその四：吸血鬼は、仲間を増やしていくことができる。↓ ホント（このウワサは吸血鬼によつて違ふが、柘榴様はできる。）

ウワサその五：吸血鬼は、キスをした相手の血しか飲めなくなる。

↓ ウソ（理由はいえない・・・。）

など、まだまだあきれるほどあるが、俺が一番気になつてゐるウワサはこれ。

“吸血鬼は、好きな人の血を飲むと死ぬ。”

このウワサは本当かどうか全く分らない・・・。

もしこのウワサが本当なのであれば柘榴様は俺のことが好きではない・・・。

少し・・・いやかなり・・・へこむ・・・。

「簞？どうかしたのか？」

「いえ・・・何にもありません。」

柘榴様に心配をかけさせてしまった・・・。

俺としたことが

一生の不覚

「篝、散歩がしなくなった。散歩しないか？」

「ですが・・・」

柘榴様は、極端に日光に弱いはず・・・散歩なんていいのか・・・？

外に出して倒れられたら俺が困る・・・。

「傘をさせば大丈夫だよ。篝。心配してくれてありがとうな。」

確かに、日傘をさせば少しはましたが・・・すぐに倒れる。天候によるが・・・。

ツシャ——・・・

「ほら！見て、外は雪よ。」

雪・・・そうか今は冬か・・・この冬は何回目だろうな・・・。

「行こう、篝」

「はい」

今になってもあの無邪気な笑顔が好きだ・・・。

この笑顔がいつかになったら消えてしまう・・・俺の前から・・・。俺と同じ不老不死にしてしまおうか・・・。

不老不死は、人の心臓の動きを止めてキスをする、仲間を増やすことができる。

簡単なことだが、なかなか勇気がいるな。失敗したら殺して終わリだからな・・・。

「綺麗ね・・・。」

「はい・・・。」

雪より、柘榴様のほうがよほど綺麗だ・・・。

ガチャ・・・

！何だ？物音・・・金属の音だ・・・。

危ない・・・柘榴様。

【やれ】

『了解』

バアンツッ

銃声・・・柘榴様に向かって・・・柰 拓馬だ！！

「柘榴様!!」

「え・・・」

ドサッ

続く
・
・
・

柊のたくらみ

「篝？見えない。」

「見ないで下さい。」

俺の腹に直撃してくれて良かった。柊榴様に被害は全く無い……。血が……。柊榴様に気付かれてしまう……。

「血……。血の二オイ……。篝の……。血が大量に……。篝……。手をはなして。」

さすが……。柊榴様……。

地に積もっている雪が真っ赤に染まってく……。

俺の血が染まってく……。

だが……。死かない……。死ねない……。

「拓馬様！！いるのでしょうか？出てきてください！！」

「篝……。じつとしてなさい血が……。」

「大丈夫ですよ。俺は死ねない存在ですから……。」

不老不死だから……。死にたくても死ねないんだ……。

それに……。俺は一生柊榴様に仕える物として生きるって……。

「死ねないって……。まるで死にたいって言ってるみたい……。」

「はい」

死にたいさ……。だけど柊榴様が生きている限り俺は生きつづける……。

ずっと……。永遠に……。

「篝……。私の血……。飲む？」

「何を言ってるんですか！！そんな！！俺にそんなこと二度といわないで下さい！！」

「篝……。」

何を言っているんだこの人は……。

俺に血を与えたら、柊榴様の血が汚れてしまう……。ガサッ……。

誰！！柘榴様が危ない・・・

草むらから出てきたのは、銃を持った男とその横には柘 拓馬がい
た・・・。

「当たったのは、簞か・・・」

「拓馬様！！これはどうゆう・・・」

「黙れ」

バアンッ！！

「ッ！！・・・」

「やめなさい！！拓馬！！」

「あんたもうるさいよ」

やばい・・・柘榴様が・・・

柘は柘榴様に銃を向けた・・・

それでも柘榴様は・・・

「撃ちなさいよ・・・」

なにを言ってるんだこの人は・・・。

柘にそんなこといったら絶対撃つぞ！！

「・・・あんたのそういうところ嫌いなんだよな・・・」

「なら撃ちなさいよ・・・」

柘榴・・・様・・・

「ほら、簞行こう？」

「は・・・はい・・・」

だが・・・また待ち伏せしてたら・・・

俺と柘榴様は屋敷の扉のほうに向かった・・・

すると・・・

「バーカ・・・」

柘がつぶやいた・・・

柘の手には銃と刀・・・ハンター専用の刀・・・いわゆる吸血鬼討

伐刀だ・・・

あいつ・・・柘榴様を狩る気だ・・・

バアンッ！！

「柘榴様申し訳ございません!!」

ドサッ!!

「簞!!」

「うつ・・・」

「お前はいつもいつも・・・うざい・・・」

バンッ!!バンッ!!

さすがに・・・ここまでされて死ねないのは・・・つらい・・・

まさに地獄だなハハハッ

痛い・・・腹も・・・肩も・・・腕も・・・全身が痛い・・・

「簞・・・大丈夫?」

「はい・・・大丈夫です・・・だから心配しないでください」

大丈夫もなにも・・・俺は死ねないんだから・・・

どうってことない・・・それより柘榴様は・・・俺の心配より・・・

「自分の心配したほうがいいんじゃないのか?」

柘は思いつきり吸血鬼討伐用刀を振りかざした・・・

そして・・・柘榴様のほうへ・・・

「死ね、柘榴」

キイイイー・・・ン

「簞・・・」

「柘榴様に無残なまねはさせません!!」

柘榴様には柘榴様にふさわしい死に方をしてほしい・・・

ふさわしい死に方ってどんなだろうな・・・

「ウザイ・・・ほんとにウザイ・・・お前は黙ってもらえない?」

バンッ!!

（どれだけ撃つんだよ・・・と思うけど言わない・・・）

次は、足か・・・これ・・・本当に痛いんだよ・・・でも死ねない

んだよ・・・

なんという屈辱・・・。

ザクッ!!

え・・・

柘榴様・・・・柘榴様・・・・
「柘榴!!!!」

続く・・・・

無残な別れ

ドサツ・・・

「そんなに大きな声で言わなくても聞こえてるわよ・・・。」

「大丈夫か・・・柘榴・・・」

俺はあまりの驚きに敬語を使うのを忘れていた・・・

柘榴様が・・・柘榴様が斬られた・・・

あの刀はかつて吸血鬼の王だった柘榴様の御両親をも殺せた恐るべし刀・・・

こうやって、斬られてなおこうやって話せているのは柘榴様の妖力が強いからか・・・

「やっと柘榴を殺せた・・・やっと俺の使命を果たせたのか・・・フフツ・・・」

不適に笑う柘は気味が悪かった・・・

まるで・・・誰かに操られているようだ・・・

柘榴様がこうなっては仕方がない・・・柘榴様もこっち側の人間にしてみよう・・・

これしか・・・柘榴様を助ける方法はない・・・

すみません・・・柘榴様・・・

「簞・・・」

「はい・・・」

「何をしようとしてるの・・・」

「え・・・それは・・・」

バレた・・・柘榴様にバレた・・・

だが・・・これしか方法はないんだ・・・

俺は柘榴様とこのままずっと・・・永遠に一緒に生きたいんだ・・・

「簞・・・やめなさい・・・」

「だけど！これしか柘榴を助ける方法はないんだ！！だから・・・」
柘榴様の冷たくて・・・でも優しい手が俺の頬を包む・・・

「夢みたい・・・篝が私に敬語なしで話してくれるなんて・・・」

「柘榴・・・」

「私の名前を様付けしないで言ってくれてるなんて・・・」

「柘榴・・・」

「最後に・・・篝の血・・・ちょうだい？」

“最後に・・・”この言葉が俺の心をムダにむなしくする・・・
柘榴・・・柘榴・・・もっとこの名前を呼んでいたかった・・・

こんな無残な別れ方・・・

「はい・・・」

柘榴様の最後の晩餐がこれだなんて・・・

なんて・・・なんて無残な・・・

神様は意地悪だ・・・

いつも思う・・・俺をこんなカラダにして・・・柘榴様をこんな形で死なせるなんて・・・

「篝の血はこんなときでもおいしいのね・・・私の最後の晩餐が貴方でよかった・・・」

「柘榴・・・」

「ありがとう・・・篝・・・そして・・・——・・・よ篝・・・。」

柘榴様の・・・柘榴の息が・・・柘榴の体が・・・

「柘榴っ！！」

俺は柘榴にキスをした・・・そして強く抱きしめた・・・
俺が始めて柘榴にしたキスは、涙と血の味がした・・・

柘榴・・・柘榴・・・柘榴・・・

心の中で柘榴・・・と思うたびに柘榴の体がなくなっていく・・・
ついに柘榴は・・・

塵になった・・・

俺はその塵をかき集め胸ポケットに入っていた小瓶に入れた・・・
そして・・・

「ハハハ・・・無念・・・篝」

背中を向けた柁に・・・

パンツッ！！

俺は柊の体の中心に銃をあてた・・・

「なにを・・・お前は何をしてるのかわかってるのか・・・っう！！」

「黙れ・・・汚らしい虫が！！」

「何っ！？」

パンツパンツ！！

「俺の痛みを知るがいい・・・」

俺がそういった頃には柊は死んでいた・・・

知っている・・・ハンターを殺したものは処刑だって事くらい・・・べつに・・・処刑に来た奴らも殺せばいいだけ

簡単なこと・・・

柊榴・・・柊榴・・・柊榴・・・

柊榴・・・なんで俺は不老不死なんだよ・・・俺も吸血鬼だったら柊榴と一緒に死ねたのに・・・なんで俺を吸血鬼にしてくれなかったんだ・・・

なぜ俺も柊榴を不老不死にできなかったんだ・・・

俺は馬鹿だ・・・

柊を討ったところでどうにもならない・・・

柊榴・・・

俺は柊榴の分までいつまでも生きつづける・・・どんな困難が待ち受けていても俺は生きつづける・・・柊榴の欠片と共に・・・

柊榴が最後に俺に言ってくれた言葉・・・一生・・・永遠に忘れない・・・

柊榴も・・・永遠に・・・

「そして・・・好きよ・・・篝・・・」

【END】

無残な別れ（後書き）

どうでしたか？BloodyNight 見ている人いるかわかりませんが、

ぜひとも感想をいただけたらなと思います^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345p/>

Bloody Night

2010年12月30日16時08分発行